

石川栄作編訳『ジークフリート伝説集成』刊行に寄せて

——貴重な研究資料・図版の幸運な入手——

似非(エッセ)イスト 石川栄作

はじめに

今年(2026年)8月6日に拙著『ジークフリート伝説集成』が講談社より刊行されることとなった。これは2014年12月25日に同学社より刊行された拙著『ジークフリート伝説集』を増補・改訂して講談社学術文庫として発行されることになったものである。ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』やワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作で有名な英雄ジークフリートが登場する比較的短くて稀少価値の高い作品を集成したもので、今回は新たにハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』を追加した。増補・改訂版で取り上げた作品は、結局、次のとおりである。

- I. スノリの『散文エッダ』におけるジークフリート伝説——北欧第一次伝承
- II. 『ティードレクス・サガ』における英雄ジグルトの物語——北欧第二次伝承
- III. 韻文版『不死身のザイフリート』——16世紀の新しい英雄像
- IV. ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』——16世紀の職匠歌人による戯曲
- V. 民衆本『不死身のジークフリート』——1726年版の「読んで楽しい」民衆本
- VI. ティークの二つのロマンツェ——『若き日のジークフリート』と『竜殺しのジークフリート』

6月中旬から下旬にかけて再校の作業をして、そのあと7月中旬にその再校の校閲に対して回答を検討しているうちに、全体を振り返ってみて、本訳書はよりいっそう充実した編訳書になったことを実感した。以下、本訳書の特徴などをまとめておくことにしよう。

1. 九州大学文学部独文学研究室所蔵「雪山文庫」を活用

今回の『ジークフリート伝説集成』の特徴は、まず何よりも翻訳に使用したテキストが、ティークの二つのロマンツェ以外は、九州大学文学部独文学研究室所蔵の「雪山文庫」であり、現在入手できない百年以上も前の貴重な古書ばかりということである。「雪山文庫」というのは、現在岩波文庫に収録されている相良守峯訳『ニーベルンゲンの歌』(1955年刊行)の前に、同じく岩波文庫で『ニーベルンゲンの歌』を本邦初訳されていた(1939-42年発行)雪山俊夫博士(1880-1946年)の蔵書である。雪山俊夫博士の膨大な蔵書は、処分されることになった際、富山大学と神戸大学と九州大学の3大学が購入し、九州大学が購入したのはドイツ中世文学の610冊の古書である。「雪山文庫」の各書籍に押されている九州大学図書館印によると、1948(昭和23)年12月7日の日付になっている。その頃の独文学研究室内の主任教授は國松孝二先生であり、当時の購入事情の詳細は分からないが、貴重なドイツ語文献なので、ドイツ中世文学研究者に「とっては」「とっても」ありがたいことである。

私がこの『ジークフリート伝説集成』で用いた第I部の『スノリのエッダ』も、この雪山文庫2—8(Die jüngere Edda übertragen von Gustav Neckel, 1925)であれば、続く第II部『ティードレクス・サガ』も、雪山文庫2-25(Fine Erichsen(übers.): Die Geschichte Thidreks von Bern, 1924)である。また第III部の韻文『不死身のザイフリート』と第V部の民衆本『不死身のジークフリート』も、雪山文庫—3D—1—47(Wolfgang Golther: Das Lied vom Hürnen Seyfrid, 1911)であり、さらに第IV部のハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』もまた、雪山文庫3D—1—17(Der hürnen Seyfrid Tragödie in Sieben Acten von Hans Sachs, 1880)なのである。第VI部のティークの二つのロマンツェ『若き日のジークフリート』と『竜殺しのジークフリート』だけ

が、徳島大学教員となって新たに購入した書籍によるものである。このたびの講談社学術文庫『ジークフリート伝説集成』はほとんどが古書「雪山文庫」によるものであることを改めて再認識した次第である。

これらの貴重な作品は巻末の「ジークフリート伝説関連図書一覧」からも分かるように、1997年から2011年にかけて毎年1本ずつ勤務先の紀要や所属学会の学会誌に掲載していったものである。16世紀の韻文版やハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』は中世ドイツ語でもなければ、現代ドイツ語でもない。ドイツ語が中世から近世にかけて変わろうとしていた時期のことで、それぞれの単語は中世ドイツ語辞典にも現代ドイツ語辞典にも載っておらず、苦労した思い出ばかりである。今、振り返ってみるに、よくぞ翻訳したのだと、自分のことながらびっくりする。当時は若さゆえの何事にも挑戦する「勢い」というものがあり、その「勢い」に乗って翻訳していったのであろう。後期高齢者の手前まできた現在なら、とても翻訳することはできないのではないかと思う。それだけにこのたびの講談社学術文庫『ジークフリート伝説集成』刊行はとてもうれしい限りである。

2. ドイツ・オーストリア等で蒐集の古書からの図版

今回の『ジークフリート伝説集成』の特徴は、この「雪山文庫」の活用とともに、もう一つの特徴として、ドイツやオーストリアへ出かけた際に、そこで蒐集した古書の中から貴重な図版を掲載していることにある。

とりわけ第Ⅲ部の韻文版『不死身のザイフリート』に掲載している木版画は、1996年7月から9月にかけて夏休みを利用してウィーン大学に短期研修に出かけた際に、ウィーン大学独文学研究室図書館で蒐集した>>Versuch einer Formenlehre des Hürnen Seufrid von Theodor Lindemann, 1913<<に掲載の木版画24枚のうちの15枚である。同学社版では6枚であったが、今回は15枚に増やしていただいた。貴重な木版画であり、作品を読むときに大いに参考になることと思う。

第Ⅴ部の民衆本『不死身のジークフリート』に掲載の4枚の図版のうち、239ページと272ページの図版は、1996年にウィーン大学研修中にドイツの南アルプス山脈に聳え立つノイシュヴァンシュタイン城を訪れた際に、その城のさまざまな壁画に感動して、帰りがけに売店で記念に購入したパンフレットに掲載されていた写真である。297ページのジークフリート暗殺場面の図版は、上記の「雪山文庫」3C—51の古書>>Wolfgang Golther: Das Nibelungenlied. 1923<<に掲載されているもので、これも「雪山文庫」の恩恵によるものである。さらに242ページのフローリグンダ姫が竜に誘拐される場面の図版は、この「雪山文庫」を購入したと思われる九州大学独文学研究室内の主任教授國松孝二先生が、同じ年の1948年に岩波文庫として出版したグスタフ・シュワープ『ドイツ民譚集』(一)に収録の『甲羅武者ジークフリート』の中に掲載されていたものである。「雪山文庫」購入の年と偶然同じ年に発行の『ドイツ民譚集』(一)であり、不思議な縁を感じずにはいられない。

第Ⅵ部の「ティークの二つのロマンチェ」で掲載の「森の中のジークフリート」は、1997年8月に初めてドイツのバイロイト音楽祭に出かけた際に、その音楽祭が終わってから、数日間ドイツ各地のニーベルンゲン伝説ゆかりの地を訪ねて行ったときに、ドイツ・ライン河畔のケーニヒスヴィンターの「竜の岩山」(ジークフリートの竜退治の伝説が伝わる)に行く途中で立ち寄った「ニーベルンゲン博物館」で購入したヘルマン・ヘンドリヒの絵画12枚のうちの1枚である。ワーグナーのオペラ『ニーベルングの指環』四部作を彷彿とさせるもので、四部作3作目の『ジークフリート』第2幕の「森の中のジークフリート」である。

最後に、第Ⅰ部のスノリの『エッダ』と第Ⅱ部の『ティードレクス・サガ』で掲載の図版は、この『ジークフリート伝説集成』の前身である同学社刊『ジークフリート伝説集』です

でに使っていた図版である。それらはもともと同学社の 2 冊のドイツ語教科書(小栗友一編『ジークフリート』と金井英一・小林俊明編『英雄ジグルトとブリュンヒルト——北欧神話より』)に掲載の図版である。貴重な 2 種類の図版である。この 2 冊の教科書を何度か使って、ワグナー『指環』四部作をも盛り込んで行った授業が、今でもなつかしく思い出される。私にとって授業も研究の一部であった。

以上、45 年間におよぶ大学教員生活を送っている中で、機会あるごとにコツコツと蒐集していった図版であるが、このたびの講談社学術文庫『ジークフリート伝説集成』においてそれらを活用できたことに大きな喜びを感じる。

おわりに

45 年間という長きにわたる大学教員生活を振り返って、やはり九州大学大学院に進学したとき、そこで「雪山文庫」に出会ったのは、偶然の幸運とはいえ、どこか宿命のようなものを感じずにはいられない。修士論文ではためらうこともなく、ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を研究テーマに選んだが、そののちドイツ語教員として徳島大学に着任してから取り組んだ博士論文でもこのドイツ中世英雄叙事詩を取り扱った。『「ニーベルンゲンの歌」研究——中世叙事詩としての構成と内容——』というテーマであり、『ニーベルンゲンの歌』の素材史研究(第一部)と中世叙事詩としての作品解釈(第二部)をミックスさせた内容である。この博士論文の第一部の素材史研究でも、雪山俊夫博士に多大な恩恵を被っている。雪山博士の著書は「雪山文庫」だけではなく、博士の大著『ニーベルンゲンの歌 基礎の研究』(大岡山書店 1934 年、九大独文-NIBE14)もまた九大独文研究室図書室に所蔵されていた。雪山俊夫博士の東京大学で取得した文学博士の学位論文を著書にしたものである。『ニーベルンゲンの歌』の素材史研究を詳細に取り扱ったもので、「雪山文庫」の膨大な蔵書を用いて、要領よくまとめられているので、短期間でニーベルンゲン伝説の素材史が把握できて、ありがたく思った。あとは第二部のドイツ中世英雄叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』の解釈に専念するだけである。約 10 年かけて 1991 年 1 月に文学博士の学位を取得することができたが、この雪山俊夫博士の大著がなければ博士論文完成までにはもっと多くの年月が必要であつたろう。「雪山文庫」を書庫から取り出していると、本の中から雪山博士あての葉書も出てきて、それを読んで感動した思い出もある。その葉書には「このところ梅雨が長く続いているが、勉強するにはもってこいの長雨だ」という内容が書き込まれていた。昔の学者は、外に遊びに出かけることよりも、勉強に専念することが何よりの楽しみであつたということが、読み取られて、たいへん感動したのである。このような勉強への取り組みの点でも「雪山文庫」には励まされたのである。

こうして雪山俊夫博士の蔵書でなんとか完成することができた私の博士論文は、著書にふさわしい体裁で一部書き改めてから、1992(平成 4)年 1 月 20 日に郁文堂より『ニーベルンゲンの歌——構成と内容——』という表題で出版された。私の初めての著書である。その際、郁文堂を紹介してくださったのは、雪山俊夫博士に多大の影響を受けた博士論文の主査をしてくださった伊藤利男先生であり、また当時の郁文堂の社長も大井敏夫氏だったので、その偶然の「としお」トリオに「大いに」感動したことを今でもよく覚えている。博士論文の主査を務められた伊藤利男先生は、文学博士の学位記授与式のときには「博士論文はゴールではなく、出発点だ」と言われた。それ以降、私は「博士」論文を「白紙」に戻して、また初心に戻って最初から新しい気持ちで励むことにした。

その初心に戻って、まず取り組んだのが、博士論文を一般読者にも分かりやすいように図版等も織り込んでさらに分かりやすく書き改めることにしたことである。そうして新しい著書として出来上がったのが、講談社学術文庫の『「ニーベルンゲンの歌」を読む』(2001(平成

13) 年 4 月)である。この 2 冊目の著書では、「雪山文庫」のみならず、当時のドイツ取材旅行でニーベルンゲン伝説ゆかりの地を訪れて撮影した写真をもたくさん掲載していただいた。当時はまだフィルムのカメラであり、たくさんのフィルムを使ったものである。そのときの大量の写真が手元に残っているので、それらをスキャンして写真資料を整理するのが、今後の老後の楽しみの一つである。

上記の講談社学術文庫刊行後は、13 世紀初頭の『ニーベルンゲンの歌』以降に書かれたニーベルンゲン伝説作品を一つ一つ取り上げることを課題とした。それらの作品群も上記ウィーン大学研修の際に蒐集したものである。ウィーン大学独文学研究室図書館のみならず、ウィーン王宮内にある国立図書館やウィーン大学演劇学科の図書室で蒐集したものである。パスポートを見せて、コピーカードを購入すれば、近くにあるコピー機で自由にコピーすることができた。中には原則コピー禁止の古書もあったが、図書館員に「私はこの作品を探しに日本からやってきたのだ」と言って、なんとか特別にコピーを許可してくれた貴重な資料もある。そのコピーだけは航空便で送付することはしないで、大切にカバンに入れて持ち帰ったのも、荷物は相当に「重いで」と思われたものの、本当にいい「思い出」である。こうして『ニーベルンゲンの歌』以降の作品、とりわけワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作を中心に織り込んで刊行されたのが、2004(平成 16)年 12 月刊行の講談社学術文庫『ジークフリート伝説——ワーグナー「指環」の源流——』である。この著書でも「雪山文庫」の図版やドイツ取材旅行の写真をたくさん掲載していただいたが、とりわけ貴重なのは、バイロイト音楽祭の写真を数枚掲載したことである。これはその数年前から知り合いになっていろいろとご指導していただいていた東京大学名誉教授でワーグナー研究の第一人者高辻知義先生の仲介によりバイロイト音楽祭事務局から掲載の許可をいただくことができた写真である。このようにたくさんの人たちの御厚意による著書であり、現在までに上梓している 10 数冊の著書の中でも最も気に入っている著書である。

そしてこの著書と同じくらい特に気に入っているのが、このたびの『ジークフリート伝説集成』である。再校ゲラ刷を読んで校正しているうちに、講談社学術文庫『ジークフリート伝説——ワーグナー「指環」の源流——』と『ジークフリート伝説集成』の 2 冊が 50 年近くに及ぶ私のニーベルンゲン伝説研究の集大成であることをつくづく実感したことであった。とりわけ今回の訳書巻末に掲載の編訳者解説「英雄ジークフリート像の変遷」は、この著書の補足説明にとどまらず、私のこれまでの研究の総まとめでもあると言える。それだけに感慨深いものがある。

さらに今回の『ジークフリート伝説集成』刊行の 1 年前にはアイルハルト・フォン・オーベルク作『トリストラントとイザルデ』の翻訳も講談社学術文庫として刊行していただいた。これはニーベルンゲン伝説の研究を続けるかたわら、並行して研究していったトリスタン伝説研究の一つであるが、とりわけアイルハルト・フォン・オーベルク作『トリストラントとイザルデ』は翻訳不可能だと、半ばあきらめていた。しかし、講談社学術文庫編集部の人たちにも励まされて、「2 年間で翻訳できなければ、一生涯翻訳は完成しない」の覚悟で取り組み、苦難の末、なんとか最後まで翻訳することができた。2 年に 2 冊の講談社学術文庫を上梓することができたのも、講談社学術文庫の互盛央編集長の御厚意によるものである。厚く御礼を申し上げたい。ニーベルンゲン伝説とトリスタン伝説の研究は私のライフワークであり、ひととおりの集大成となる著書・訳書を上梓することができて、とてもうれしいことであるが、これで研究は終わったわけではなく、今後とも機会あるごとに学び直して、さらに完成に近いものを創り出していきたいと、決意を新たにしているところである。

ジークフリート 伝説集成

石川栄作 編訳
ishikawa eisaku

ジークフリート伝説集成 石川栄作 編訳



9784065448250



1920198016005

ISBN978-4-06-544825-0

C0198 ¥1600E

定価：本体 1600 円（税別）

竜を退治した際に、その血を浴びて不死身の肌を得たものの、背中にある唯一の急所を刺されて暗殺されるゲルマン・ドイツ伝説の英雄ジークフリート。ニーベルンゲン伝説をなす重要な人物としてワグナーの『ニーベルングの指環』に登場する英雄は、伝承の過程でいかに変容したのか。北欧伝承から一六世紀を経てロマン派に至る作品群の貴重な集成。

不死身の肌を得た英雄は、 いかに伝承され、 いかに変容したのか？

北欧伝承をなす『散文エッダ』、『フィードレクス・サガ』から
16 世紀の『不死身のザイフリート』、『不死身のゾイフリート』、
18 世紀の『不死身のジークフリート』、そしてロマン派まで。

50
講談社学術文庫
50周年

貴重な作品群を一冊で

2932

英雄ジークフリートといえば、ニーベルンゲン族を打ち倒して、その財宝の所有者となり、また竜を退治した際にその血を浴びて「不死身の英雄」になったものの、背中の一の急所を槍で突き刺されて暗殺されてしまう運命にある英雄を思い浮かべるが、この英雄伝説の起源はといったいつの時代まで遡るのだろうか。

（「編訳者解説 英雄ジークフリート像の変遷」より）



現代ビジネス
「学術文庫 & 選書メチエ」サイト

竜を退治した際に、その血を浴びて不死身の肌を得たものの、背中にある唯一の急所を刺されて暗殺されるゲルマン・ドイツ伝説の英雄ジークフリート。ニーベルンゲン伝説をなす重要な人物としてワグナーの《ニーベルングの指環》に登場する英雄は、伝承の過程でいかに変容したのか。北歐伝承から一六世紀を経てロマン派に至る作品群の貴重な集成。



9784065448250



1920198016005

ISBN978-4-06-544825-0

C0198 ¥1600E

定価：本体1600円（税別）



KODANSHA

